

「タイムリー・ウィズダム」を育む アーヴィン・ラズロを読んで

奈良教育大学 中澤静男

平成 16 年度教育改革国際シンポジウムにおいて、哲学者で未来学者でもあるラズロ氏が行った基調講演を基に ESD についての考察を深めたい。

ラズロ氏は、システムの安定の限界に到達したことによって、転換の時代に突入する社会進化の一過程を大転換期と名づけ、社会における根本的変化の過程を 4 つの局面に区切っている。第 1 場面が引き金的局面であり、第 2 場面は社会が非常に不安定に、持続不可能な状態に入る局面、第 3 場面が決定的な臨界点に近づいた局面、そして崩壊か局面打開の第 4 場面を迎えると述べている。そして、人類の持続可能な発展のためには、一人ひとりが革新的な洞察と倫理を身につける必要があり、そのために教育が果たす重要な役割は、世界情勢に関する適切な概説を行い、偏りのない今日的状況の全体像とその状況がはらむ肯定的可能性、否定的可能性を伝えるという、学習プロセスの機会を提供することであると主張する。

このラズロ氏の主張について、次の 3 点から考察を加える。一つ目に現代社会の大転換期としての位置づけについて、二つ目にタイムリー・ウィズダムの学び方、三つ目が社会変革のスピードについてである。

一つ目の現代社会の位置づけについてである。ラズロ氏によると、第 2 局面においては、人口増加と資源の大量使用に伴い、社会が複雑化すると述べられているが、産業革命以降の人口増加の事実から、農業社会から工業社会への移行に合致すると考えられる。その後、グローバル化や格差社会の出現について述べられており、まさに現代社会を体現している。また、第三の局面において転換を誘発する初期条件として「持続不可能な経済、社会、文化的条件」と「持続不可能な環境的条件」に言及されているが、貧困層の拡大、テロリズム、熱帯雨林の消失と生物多様性損失、気候変動の加速といった事象に目を向けると、現代社会はすでに第三の局面にあると思われる。

二つ目のタイムリー・ウィズダムの学び方についてである。ラズロ氏はその方法として 2 つ述べている。一つは、今日の世界を支配している原則の多くがすでに時代遅れであるという認識を浸透させることであり、もう一つは世界情勢に関する適切な概説を行い、偏りのない今日的状況の全体像とその状況がはらむ肯定的可能性、否定的可能性を伝えるということである。時代遅れの原則について、ラズロ氏は 2004 年のブダペスト・クラブでの世界賢人会議で採択された宣言を引用して具体的に指摘するだけでなく、現実に危険な思想についても明らかにしている。このような主義主張が時代遅れであることを若い世代が認識することが重要であると述べているが、例えば日本の大学生のほとんどは、ここに述べられている認識はすでに獲得している。しかし、日本の若い世代からは社会変革に関する意見や行動は表明されておらず、例えば社会変革の契機とすべき選挙における投票率も、20 代が最低である。また、新聞、テレビ、インターネットなど、ラズロ氏が述べるような世界情勢を伝える手立ては多様となり、知る機会は拡大しているものの、それによって創造力を働かせ

て考え抜いた独自の結論に到達しているとは思えない。若い世代には社会に適応して流されていくのではなく、社会に対する関心を高める手立てが必要である。その方法が不明であるだけに、ラズロ氏の主張は画餅であると言わざるを得ない。

三つ目の社会変革のスピードである。ラズロ氏は、局面打開のシナリオにおいて、2005年～2010年が局面打開の第一歩として、一人ひとりが世界を平和で持続可能なものに変えていく有効な担い手になれるという考えが次第に多くの人々の心をとらえると述べているが、まったくその気配はない。誰もが自然環境の保全や差別や貧困・飢餓のない社会の実現、世界平和の構築が重要であると認識している。

しかし、その考えを行動面で示すことを、社会の勝ち組である権力者や企業は決して許容しない。ラズロ氏は軍事費のことについて言及しているが、兵器の主要な生産・輸出国、また核兵器を保有する国々の多くが、国連安全保障理事会の常任理事国であり、拒否権を持つという事実からも、社会変革がラズロ氏が述べるようなスピードで展開していくとは考えられないのである。

以上のラズロ氏の基調講演を踏まえ、現代社会を支えるシステムや価値観は時代遅れであり、それにしがみつくとことは、崩壊（ブレイクダウン）へのシナリオそのものであるということが確認できた。一方、局面打開に対する教育の役割については、スローガンは理解できるが、実践面では不明なままである。2015年に持続可能な開発目標が示され注目されている。日本ユネスコ国内委員会は、持続可能な開発目標の17の目標達成に貢献する教育がESDであると述べている。持続可能な開発目標が本当に持続可能な社会の実現に寄与するとされる「世界の常識」についても、ラズロ氏の「個人や社会は人間の社会生態系の安定の限界と調和を図る必要がある」という観点から検証する姿勢を、教育者は持ちたいものである。

**「持続可能な教育社会をつくる」(日本ホリスティック教育協会、せせらぎ出版、2006年)
『「タイムリー・ウィズダム」を育む—現代教育の最重要課題—(アーヴィン・ラズロ)』**

大和郡山市立郡山西小学校 島 俊彦

持続可能な開発を実現させるためには、新しい洞察と新鮮な創造力(「タイムリー・ウィズダム:今こそ求められる知恵」)が必要であると主張するアーヴィン・ラズロ氏は、現代教育の最重要課題として、若い世代におけるタイムリー・ウィズダムの育成に向けたプログラムづくりの重要性を説いている。

ラズロの論考について、次の2つの観点から検討する。1つ目に社会力について、2つ目に倫理についてである。

1つ目の社会力についてである。ラズロは「国内外の市場の目先の要求に応える知識ではなく、その先の、現在の社会を持続させるのに必要な知識を伝えること(未来を見通した適応)」が教育のさらなる課題であると主張しているものの、課題の解決に向けた方法については言及していない。そこで、門脇厚司の主張を援用する。門脇は、「社会をつくり、つくった社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力」を社会力として定義した上で、社会力形成においては、3つのステップ(①社会的原基の形成、②社会的要素の共有、③社会的行為の日常化)が重要であると主張する。授業者が、3つのステップを辿るような、探究的な学習プロセスの充実を意識することによって、ラズロの懸念する課題を解決することができるのではないかと思われる。

2つ目の倫理についてである。ラズロは探究的な学習プロセスの機会によって、学習者の中により適切で信頼できる倫理が育まれると主張している。ラズロの言う倫理とは、世界市民として普遍的な価値観や態度を意味するのであろう。倫理とは教えられるものではなく、探究的な学習プロセスにおいて、学習者が構成するものである。筆者は小学校第四学年総合的な学習の時間において、探究的な学習プロセスを通じて、児童に倫理(持続可能な水の使い方)を構成させる実践を行った。実践を通じて見えてきたものは、倫理を構成する過程において決定的に重要なことは、対話だということである。ラズロは「学習者は適切な判断力と、洞察を行動に変えていく想像力を働かせ、考え抜いた独自の結論によって、これを学ぶことができるのである」と指摘する。学習者が独自の結論を導くには、自己と他者の価値観を交流させる必要がある。一面的な見方・考え方から結論を導くのではなく、多面的かつ多角的な見方・考え方を知った上で独自の結論を導くことで獲得する倫理は、より世界市民として普遍的な価値観や態度となりうるだろう。

以上2つの観点からラズロの論考について考察した。ラズロが今日の教育システムに求める、若い世代におけるタイムリー・ウィズダムの育成に向けたプログラムづくりは、持続可能な社会の創り手を育む上で、喫緊の課題である。学校現場に目を向けると、そのような学習プロセスの機会が与えられているとは言い難い現状がある。教員自身が知識偏重の客観主義パラダイムの教育観から、学びに焦点を当てた構成主義のパラダイムへと速やかに移行できなければ、持続可能な社会の創り手を育むという次期学習指導要領改訂の理念も、

机上の空論に終わるだろう。学習指導要領の改訂という教育界の大転換期に好機を見出し、理論に裏付けられた大胆な実践を重ねていくことが、我々現場の教師に託された使命である。知識注入型授業からの脱却を図り、知恵の習得を標榜とした授業実践へと転換していきたい。

アーヴィン・ラズロ「「タイムリー・ウィズダム」を育む—現代教育の最重要課題（平成16年度教育改革国際シンポジウム—「持続可能な開発」と21世紀の教育—基調講演）」

アーヴィン・ラズロ（永田佳之監訳）「「タイムリー・ウィズダム」を育む—現代教育の最重要課題

平成16年度教育改革国際シンポジウム—「持続可能な開発」と21世紀の教育—基調講演）

初出：教育改革国際シンポジウム報告書（2005）『『持続可能な開発』と21世紀の教育：未来の子ども達のために今、私たちにできること—教育のパラダイム転換—』国立教育政策研究所、p7-21

書籍：「持続可能な教育社会をつくる—環境・開発・スピリチュアリティ—」せせらぎ出版 2006.3 p31

奈良教育大学附属小学校 河野 晋也

教育の役割とは、世の中の有益な知識を今の世代から次の世代へと伝えていくことというのにはよく言われることであるが、ラズロは「これは今も通用する考え方ではあるが、有益な知識とはどのようなものかという定義は変化するものである。」として、「タイムリー・ウィズダム」の重要性を説いている。すなわち、「現在の社会をこの先も継続させていくためには、教育を通じて歴史的知識のみならず未来予測的知識を伝えていくことが必要である（p12）」ということ、さらに「おそらく歴史的に先例のない状況下において、次世代に、創造力を働かせ、責任を果たすのに必要な判断力を育むということである。（p12）」ということである。これは、単に歴史的知識を予測可能な未来に延長するものではない。大転換期の第三の局面において根本的に新しい状況が生まれてくると、もはや、歴史的知識を用いた推測だけでは十分ではない。それゆえに持続可能な開発を実現させるためには、新しい洞察力と新しい創造力が必要だということになる。（p29）

以上のようなタイムリー・ウィズダムの考え方にのっとり、行われる学習を以下の三点から検討を加えたい。一つは長期的思考、二つ目は批判的思考、三つ目は、構成主義的学習観についてである。

長期的思考とは、今現在の課題だけでなく、将来にわたっての公正を追究する思考であり、ESD においてはぐくむべき能力の一つである。ただし、ただ単に「未来がどうなるか」「どのような未来が望ましいか」だけでなく、将来世代のニーズを考えたケア的な思考を含むものである必要があるだろう。これは先に引用した通り、「次世代に、創造力を働かせ、責任を果たすのに必要な判断力を育む」というタイムリー・ウィズダムの考え方に一致する。

二つ目の、批判的思考は、自身の考え方を反省的に熟慮することを求める。自身の知識が絶対的ではない、また現在通用している概念が崩れる可能性がある、という想定は、自身を批判的に考える省察に関わると言える。省察の概念はOECDのキーコンピテンシーにおいても基盤となる能力としてふれられていることから、このタイムリー・ウィズダムが現在世界的に必要とされていることが感じられる。偏りのない今日状況の全体像とその状況がはらむ肯定的可能性、否定的可能性を伝えることでタイムリー・ウィズダムが促されるならば、この批判的思考は重要なものといえるのではないだろうか。

こうした自身に対する熟慮的省察を促す、つまり自身の考えを問い直すのが構成主義的

学習観と考えている。「知識は絶対的なものではなく、相対的なものであり、共同体内に置いて構成される」という知識観は、「タイムリー・ウィズダムとは教えられるものではなく、自ら学ぶものである」という考え方に近い。

以上のことから、タイムリー・ウィズダムを、ESD ではぐくむべき能力、そしてそれを支える学習観としてとらえ直した。